Bulletin of the Faculty of Education
The Department of Educational Psychology
1984, Vol. 31, 193 – 209.

女性性の内的受容に関する研究*

——序報，女子短大生の場合——

池田博和　森田美弥子[1)]　粟田順子[2)]

I　はじめに

女性性の内的受容というわれわれの主題は，臨床経験の中での疑問に端を発している。われわれは多くの青年期ケースの心理療法を体験してきたが，その中で男子事例と女子事例では，その様相がかなり，あるいは非常に異なっているという印象をいだいてこざるをえなかった。たとえば登校拒否，その病像のあらわれ方も，治り方も，全くといっていいほど違っている。徹底的に何年も自室に閉じこもったりするような場合は例外なく男子であって，女子の場合は複雑微妙な要因がからみ，派手な浪風の起伏も多いが，ちょっとした何でもないような，たとえば手芸に没頭するとかアルバイトに出てボーイ・フレンドができるとか，各種学校に進路を決めるとかといったきっかけで比較的，容易に立ちなおりうる。女性の方が概して治りがよいといってよい。

いいかえれば，男子事例の場合は慢性的な経過をとりやすく，よくなる場合でも比較的単調な相様を示すのに対して，発症から治癒へのドラマティックな展開を見せるのはまず，女性事例である。またその主題が比較的，明確であるのも女性の方である。このことが，心理療法の症例研究においては圧倒的に女性事例が多いことの背景にもなっている。精神病院の保護室で荒れ狂っていた娘が，三カ月後には見ちがえるほどの洗練された美人になって，外来にあらわれるようなこともそれほど珍しくはない。しかし男子の場合に，これと同様な事態がおこることはまず稀であろう。

青年期の病像にこのような性別による相違が出てくるのはなにゆえにであろうか。ひとつ考えられるのは次の点である。青年期危機一般は，すでにこれまで何度も指摘したように，分裂病圏の病理とみることができ，それは本質的に男性的な特性が問われる問題であるということである。すなわち，出立，自立，自己確立，自己主張，主体性，アイデンティティ，あるいは社会性といった方向への自己の自己性の統合が問題化してくるあり方であり，女性においてあらわれてくる場合であっても，その中の男性的側面にかかわる問題なのである。笠原（1977）は「ステューデント・アパシー」の文脈で，このノイローゼは原則として男性の病理であり，もし女性におこるとしたら，男性に伍する女性，男性同様の自我を確立させた女性にであろうと述べている。この「ステューデント・アパシー」，あるいは「選択的退却症」の概念は，そのまま「アイデンティティ拡散症候群」といいかえても一向さしつかえないものであるが，そのアイデンティティ概念は，周知のように男子事例の観察にもとづいて出てきたものであった。分裂病様態とはまた，いいかえれば，アイデンティティの先験的次元での不成立の事態だということができる。この点も，この段落のはじめに述べたことの論拠となるものである。

つまり，男子が青年期でつまずく場合には，その存在の根底までゆり動かされるのに対し，女子の場合には比較的，非本質的部分でのゆらぎだといってもよいかもしれない。いや，このようないい方ではまだ不正確であって，次のようにいう方が，まだしも適切であろう。すなわち，一般に，自分が「男であること」あるいは「女であること」ということは，自己が「自己であること」の一面であって，それ自体だけを単独で切り離して考えることはできないということをまず，おさえておこう。ところで，「自己が自己である」といういい方，「私にとっての私」「私は私である」といういい方が成立するために

＊　本研究は，われわれ3名の執筆者のほかに寺田桂子，丹羽くみ恵，松本真理子，服部孝子の4名からなるグループの共同研究活動の結果，まとめられたものである。結果の整理にあたって，とくに寺田には多大の協力をえたことを記しておきたい。

1）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）
2）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期）

は，はじめの「私」とあとの「私」が別のものであるという前提がなければならない。私と私の間には一定の乖離，ズレがあるものなのであり，そうした私から自己疎外された私をまたひきうけ，不断に統合していく動きこそが自己ということなのであると木村（1981）にならっていうことができる。それがアイデンティティということの真意に他ならないし，またこの私の乖離を的確に意識化できるようになるのは，思春期以降のことである。アイデンティティ拡散のように，自己が自己であることの統合に何らかの破綻をきたしている場合，女性ならば，自己の一面である「女であること」の受容をきっかけにして，自己の統合をなしうることもあるし，その逆もありえよう。つまり「人間として」自己であることをひきうけられれば，女であることもひきうけられよう。ところが，男性においては，このことは少々やっかいとなる。男性においては自己が男であることを受容することと，自己を統合することは，ほとんど同じことを意味しているのであって，積極的，主体的に自己確立していかなければならないという男子青年にとっての性役割獲得の課題は，単なる役割の次元にとどまらず，存在論的なアイデンティティの中核に直結する事柄となりやすい。これに対して，女子青年の場合には，積極的な自己確立，自己獲得の方向性をひっこめることによって，つまり，社会的に女性性役割として一般に期待され，容認されている受動的，受容的，依存的な，あるいはおとなしく，控えめで，やさしい，「他者のための存在」であるようなあり方をひきうけることによって，自己を統合しうるということは，男子に比べればより容易なことであるように思われる。しかし，それによって，「産み，はぐくむ強い母性」という女性に特異的な自己実現へのコペルニクス的転換も可能となるのである。

以上の点については，われわれ（池田ほか，1979）はかつて，女性性役割を受容することによって，みごとに青年期危機から立ちなおった女子事例に即して，述べておいた。その中ではまた，「身体性」の問題にもふれたが，要するに，男子においては，身体性が精神性と乖離しやすく，異物化し自己の存在全体を震撼させやすいのであるということであった。女子の場合は，より身体親和的であり，「思春期やせ症」のような形で身体性が否定されるのは，むしろ例外的な場合なのではないだろうか。いずれにしても，身体的次元での同一化が問題となるような事態は，自己成立にとって重篤な危機性のうちにある。男子の場合は比較的そこにまでつながりやすく，女子にとっての自己確認は，その次元ではなくむしろ，社会的次元での自己愛的被受容欲求の形をとりやすいのであろう。

青年期病像における性差の問題については，以上のまだ試論的としかいえない論議を一応の前提におくとしても，一般青年心理学の文脈での「女性性の受容」という主題には，なおまだ，さまざまな立ちいった問題が出現してくる。たとえば，対人恐怖症もまた，青年男子にかなり特異的な病理であることが定説となっていた。しかし，最近では女子にも増加し，都会の大学生を母集団とすれば，性別による差異はほとんどないともいわれるようになってきた。それだけ「男子に伍する」女性が増えているからであろうか。少くとも，大学生活を終了するまで，学生としての達成課題に向かって努力してきた優秀な女子学生にとっては，女性性の受容は多少とも困難な課題になるのではないだろうか。実際，女子学生に「自己探究」といったレポートを書かせてみると，授業の中で，たとえば「同一性」といった概念や分析の枠組，視点さえを与えれば，そうした「同一性」をめぐった問題も少なからず表出されてくるのである。

一般に，今日の社会現象をみても，「翔ぶのがこわい」とか「シンデレラ・コンプレックス」など女の自立をめぐるさまざまな話題はにぎやかであるし，そうした類の出版物も少なくない。手もとにある大学生活に関する本をみても，「女子学生の病理」として思春期やせ症，未熟な女子学生，アニムス的女子学生，女子学生のうつ病といった項目がならんでいる。各年代で「女の自己実現のために」という「現代型離婚」が増しているという。われわれの臨床経験でいえば，結婚直後に離婚問題が起こるような多くの場合，まだ妻役割をとれるまでに成熟していない女性をそこにみることが少なくない。女子非行の女の子は，「早期完了」としてひとつの女の道を早早と選んだのであるようにみえる。

要するに，今日，女性が女性性を受容するという課題には，さまざまな問題や齟齬があるのではないか。女性には女性に特有な青年期への入りかたと出かたが，つまり，青年期の特異なのりこえのプロセスがあるのではないか。かつての数十年間において，心理学の舞台に「青年期」が登場してきたが，それは主に男子青年を対象としたものであった。今日以降は「女子青年」が概念化される時代ではないだろうか。実際，ここ数年，それまでの性役割研究とは違った，女性性の受容，あるいは自分が「女であること」の意識を主題とする研究が数多くなされるようになってきた。このことも上の今日的状況を反映しているのではないだろうか。もし，女子青年には女子青年特有の青年期のありようがあるのであれば，それを明らかにしておくことは，女子事例への臨床的援助的接近にとっても重要な意味をもつことになろう。このような問題意識をもって，われわれは研究会をもち，討

議を重ねてきたが，今回，手はじめにある調査を行ったので，序報としてここに報告しておくことにしたい。

Ⅱ　目　　的

われわれにとっては，一般に女性は「自分が女性であること」をどのようにひきうけていくのかという，女性性受容の過程を明らかにしていくことに究極的な目的があるが，今回はその手がかりを得るために，短大生を対象に女性性受容のあり方とその背景を調査し，短大生の女性性の特徴をとらえることにしたい。

Ⅲ　方　　法

1　対象者と実施時期

愛知県内のM短大保育科1年生78名（昭和58年7月），及びN短大人間関係科2年生40名（うち19名は昭和58年10月，21名は昭和59年5月），計118名に「女性であること」の意識調査として質問紙を実施した。

2　質問紙の内容

以下の5項目について自由記述形式で回答を求めた。

①女性に生まれてよかったか，あるいは，今度生まれ変わるなら男女どちらがよいか（女性性の受容）

②思春期に入った頃，自分が女性であることについてまた第二次性徴についてどう感じたか（身体性の受けとめ）

③これまでに自分が女性であることを強く意識したり違和感をもったりしたのはどんな時か，小・中・高・それ以降と4期に区切って（女性性の意識のきっかけ）

④女性であるとはどういうことか，自分はどんな女性でありたいか（性役割観）

⑤両親の女性についての考え，躾，期待はどういうものであったか（両親の養育態度）

①と④は個人の現在の女性性のあり方を，②③⑤はそこに至るまでの過去の影響要因をとらえるものである。

3　分析の方法

まず各質問項目について自由記述の内容を分類し，短大生における女性性の特徴を5つの側面毎に把握する。次に項目間の関係を見ていくことにより，女性性受容過程における重要な側面を明確にする。

以上の全体的傾向の検討にもとづいて，各個人の5項目の回答パターンから，短大生の女性性のあり方を特徴的に示している例を紹介してまとめとする。

集計途上，M短大とN短大との間で分類カテゴリーに差はなかったため，2集団を区別せずにとり扱った。全質問項目に対し無回答か分類不能という2名を除き116名が分析の対象となった。その中には項目によっては無回答という資料もあった。

Ⅳ　結　　果

1　各質問項目の回答分類

(1)　女性性受容

項目1には二通りの質問が含まれているが，両者をこみにして全体の記述の中にあらわれたその人というものを，「女性性受容―拒否」の軸上で位置づける。女性であるとの現実に対し「よかった」と答えた95名のうち，26名は「生まれ変わるなら男」を選択しているが，「違った人生，男の立場も知りたい」という「試験的選択」（戸田・堅田，1982）的意味合いのものは実質的に女性性受容群とみなし（伊藤，1981），それ以上に明確な理由づけを述べているもののみ拒否群とした。

以下の4群が項目1の分類カテゴリーである。

①積極的受容37名（31.9％）―― 出産・育児など母性的特質，感情豊か・おしゃれなどの具体的特性をあげて女性を讃美しているもの。「女性の方がむしろ自由・強い」と積極的に女性の価値や可能性を認めるもの。

②消極的受容31名（26.7％）―― 「女性は社会的役割や責任が乏しい，甘えがきく，男に頼ればよい，だから楽でよい」とする依存的構えのもの。

③問題意識稀薄21名（18.1％）―― 「なんとなく女でよい」「特に嫌ではない」「今が女だから次は男でもかまわない」など，要するにどちらでもよいとする立場。女性であることに拒否的ではないが，積極的意義も見出せないもの。②よりさらに漠然とした受容といえる。

④女性性拒否27名（23.3％）――②と正反対で「女は楽だからつまらない」というもの。社会的差別（男は優利，女は規制される），感情面の特徴（男はサッパリ，女はウジウジ）等を理由に女性を嫌悪し，男性を羨望しているもの。

従来の研究でも主として大学生・短大生を対象として60～80％が受容的という結果が得られており，今回の①から③まで含め76.7％という値もこれと合致している。ただ②③を合わせた消極的あるいは漠然とした女性性受容が44.8％と，積極受容（①）を上回って多いのは，本研究の被験者の特徴である。

(2)　身体性の受けとめ

項目2についての回答は，思春期の身体的変化に対しどう感じたかにより以下の4カテゴリーに分類した。

①否定的感情45名（47.4％）―― 不安，おそろしさ，おどろき，不快，恥ずかしさを含む。しかし記述の仕方には深刻なニュアンスは感じられなかった。

②肯定的感情24名（20.7％）―― 安心感，喜び。

③混合的12名（10.3％）――喜びと不安の両方を感じたもの。

④中立的21名（18.1％）――別になんとも感じなかったというもの。

初潮に対する青年の感情を調べた白井（1966）の研究では①が82％もあり，予備知識不足が不安を産むとの指摘がされている。20年を経て，情報も豊富で開放的な現代社会においては，深刻な不安なしに思春期の身体的生理的変化を通りすぎていくようである。

(3) 女性性の意識のきっかけ

項目3についてはかなり多岐にわたる回答が得られたが，以下の6カテゴリーに分類した。

①意識しなかった――主として小学校時代。

②身体的側面・外見的特徴――小中学時代では「第二次性徴」のこと，高校以降「身だしなみに気をつける」などの記述へと変化している。

③男子と比較し弱さを意識――体力や身体の差，時に精神力の差（男子の方がしっかりしてきた）を感じた時。

④男性を意識――片想いや恋愛の体験。

⑤性役割期待にまつわるもの――周囲の態度や世間の目，また自分自身の中に内面化された価値基準への気づきは高校以降に増加する。これについてはただ「意識させられた」だけでなく，それによって受容的になったり拒否的になったりする。

⑥その他――理由なく「とにかく意識した」「男女のちがいを感じた」とするもの。

全般には，まず外面的特徴（身体や行動上の男女差）への着目から，やがて性役割期待を背景とする内的気づきへと変化している。

(4) 女性役割観

項目4の回答分類にあたっては，男性性・女性性・人間性の三次元（伊藤，1978）を参考に，母性性という視点も加えて，以下の5カテゴリーにまとめた。

①所謂「女らしさ」の全面強調33名（28.4％）――やさしさ・思いやりといった一般的女性イメージは多くの短大生自身にとっても「あるべき女性像」となっており，「男をたてる」「従う」といった表現も多い。

②母となること30名（25.9％）――よき妻よき母となり家庭を守ることを女性であることと同義とするもの。出産・育児の歓びを含む。

③やさしさと強さの共存30名（25.9％）――「表面はやさしく芯はしっかり」「いざというときに強い」というところを指摘。②に通ずるもの（母は強し）と女性の中にある男性的な面を強調する④⑤に近いものとある。

④一般的女性像にこだわらず個性尊重18名（15.5％）――自立志向，及び男女の区別を越えて「人間として」「自分らしく」生きることを重視するもの。

⑤女性の独自性強調8名（6.9％）――「女性ならではの生き方をすること」などの表現。具体的なことにはあまり言及されていないが，①のようにひかえめな女らしさではなく，前面に出ていこうとするもの。

全体として伝統的な女性像を疑問なくとり入れる（①②），それを否定する（③④），乗りこえる（②～⑤）という方向性が感じられるが，分類にあたっては上記のように具体的内容でわけた。

(5) 両親の養育態度

項目5については，父母それぞれが娘に対し，家庭志向（結婚して平凡な妻・母となることを期待，女らしくと躾）か，自立志向（職業をもつことや社会に目を向けることを期待）かという視点から分類した。

①父母ともに家庭志向71名（61.2％）

②父が自立志向，母が家庭志向2名（1.7％）

③逆に父が家庭志向，母が自立志向16名（13.8％）

④父が家庭志向，母も基本的には家庭志向だが社会にも目を向ける必要性や精神的に強い女性であれとの期待が強いもの10名（8.6％）

⑤父は家庭志向，母は「女は損」との被害意識をもつ3名（2.6％）

⑥父母とも自立志向3名（2.6％）――男女平等主義や人間としてという躾も含む。

おしなべて父は家庭志向であり，母の態度のバリエーションがポイントのようだ。そこで父については無記入

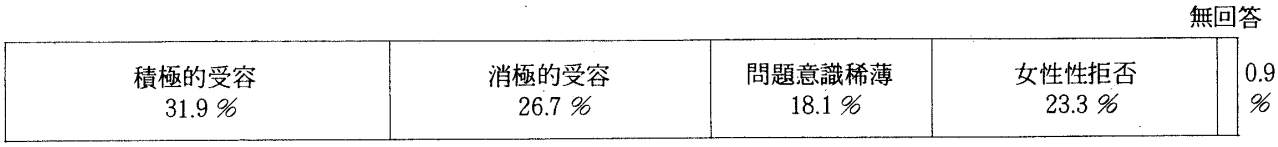

図1 女性性の受容

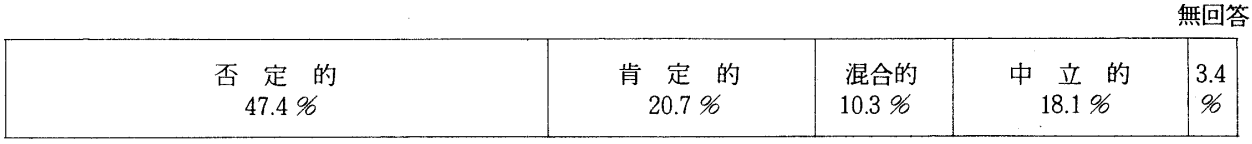

図2 身体性の受けとめ

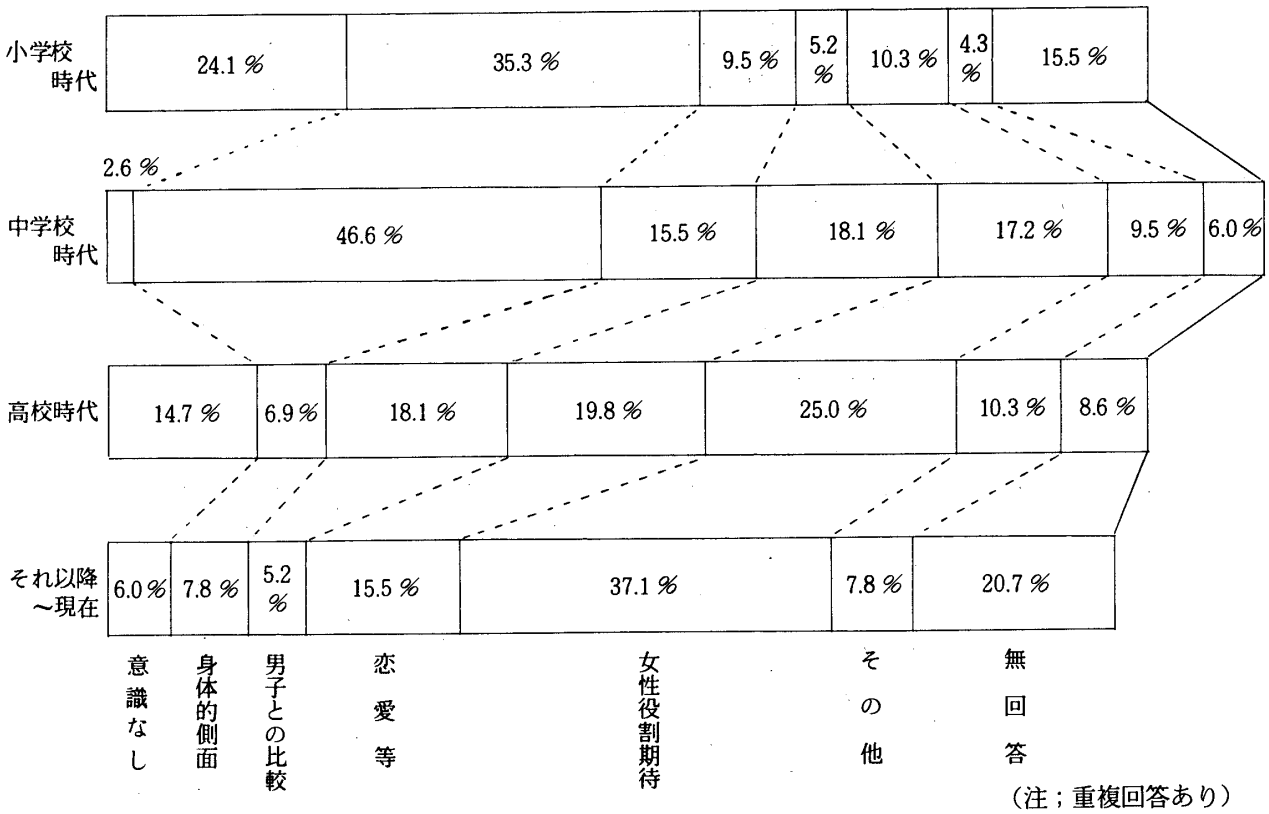

図3　女性性の意識のきっかけ

図4　性役割観

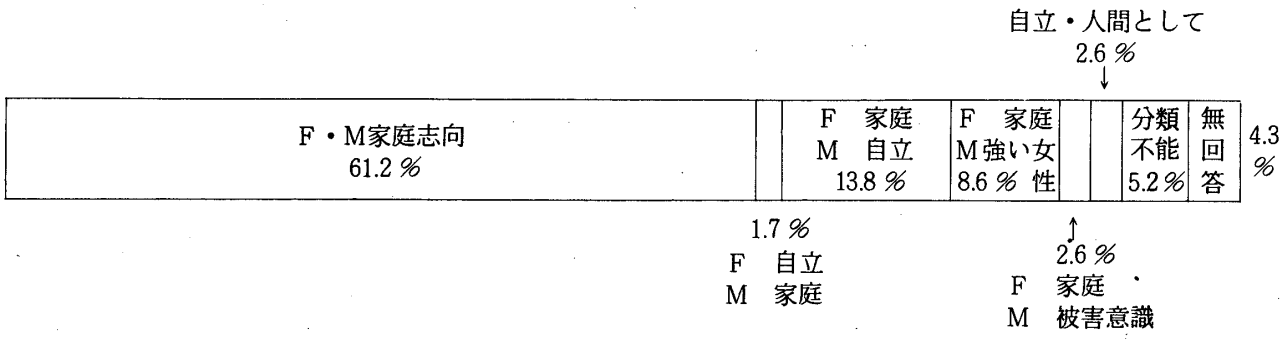

図5　両親の養育態度

の場合でも母についての内容から①③～⑤に含めた。

以上の各項目の回答分類カテゴリーとその割合は，図1～5に示されている。

2　質問項目間の関連

次に女性性受容過程においてどういった側面がどのように関与しているのか知るために，現在の女性性受容のあり方や女性役割観（項目1と4）を中心に，過去における影響要因（項目2，3，5）との相互関係をみていくことにする。

(1)　女性性と身体性

項目1と2の関係を表1に示す。思春期の変化に対する肯定的―否定的感情と，現在の女性性受容―拒否との対応は特にみられない。どちらかというと混合的感情を体験したものが，後に拒否的となりやすい傾向が示されているが，少数でありはっきりとは言えない。もともと項目2の記述には真に否定的なものはなく，健康者集団にあっては，身体性の受けとめはむしろ無意識に通りすぎていくものであり，女性性の受容にとっては当然の大

表1　女性性の受容と身体性の受けとめとの関連

身体＼女性性	積極的受容	消極的受容	問題意識稀薄	女性性拒否	合計
否定的	16	15	11	13	55
肯定的	12	5	3	5	25
混合的	2	2	4	4	12
中立的	7	7	3	3	20
合計	37	29	21	25	112

表2　女性性の受容と女性意識の変化

	積極的受容	消極的受容	問題意識稀薄	女性性拒否	合計
受容→受容	5	4	2	3	14
抵抗→受容	9	3	3	4	19
抵・中立→抵・人間性	3	0	2	9	14
合計	17	7	7	16	47

表3　女性性の受容と性役割観

性役割観＼女性性	積極的受容	消極的受容	問題意識稀薄	女性性拒否	合計
女らしさ	9	9	7	7	32
母性	9	9	7	4	29
共存	12	7	5	7	31
自立・人間的	5	4	3	6	18
女性の独自性	5	1	1	1	8
合計	40	30	23	25	118

前提なのであろう。

(2)　女性性受容の変遷

項目2の結果から身体的側面については個人差があまり見られないので，項目3では主として社会的側面（役割期待に関することが中心）に注目し，それに対する抵抗・反発や喜び・受容感が記述されているもの47名のみをとりあげて，過去から現代にかけての受容感の変化を見ていくことにする。小・中・高・現在の流れとしては大きく分けて次の3通りが見られた。

①一貫して受容的で変化なし（受容→受容）14名

②以前は女性であることに何らかの不満や違和感をもっていたが，受容的に変化したもの（抵抗→受容）19名

③一貫して抵抗感あり（抵抗→抵抗）14名――「人間的生き方」志向や，抵抗はあるが「女性であることを認めはする」ようになった両価的なものなど，無条件に受容していないものも含める。

項目1との関係は表2に示した。これによると，抵抗→受容の変化と現在の積極的受容，抵抗→抵抗と現在の拒否感との結びつきがそれぞれ強い。つまり自分が女性であることに明確な価値を見出している者は，いったん疑問や反発を感じそこを乗りこえてきたということが言える。

(3)　女性性受容と性役割観

項目1と4はともに現在の個人の考え方を尋ねている。自己に対する意識と女性一般像の関連ということで検討してみたい。表3からは，積極受容と女性の独自性，女性性拒否と自立・人間志向及びやさしさと強さの共存という対応が見られる。女性であることに拒否的なものは

表4　女性性の受容と両親の養育態度との関連

養育態度 父	養育態度 母	積極的受容	消極的受容	問題意識稀薄	女性性拒否	合計
家庭志向		24	19	15	12	70
自立	家庭	1	0	1	0	2
家庭	自立	7	4	0	6	17
家庭	強い女性	2	1	4	3	10
家庭	被害意識	0	0	0	3	3
自立・人間として		1	2	0	0	3
合計		35	26	20	24	105

表5　女性役割観と女性意識の変化

	女らしさ	母性	共存	自立・人間的	女性の独自性	合計
受容→受容	6	5	3	1	1	16
抵抗→受容	5	8	5	1	1	20
抵・中立→抵・人間性	1	1	5	6	0	13
合計	12	14	13	8	2	49

表6　性役割観と両親の養育態度との関連

養育態度 父	養育態度 母	女らしさ	母性	共存	自立・人間的	女性の独自性	合計
家庭志向		25	21	15	8	7	76
自立	家庭	0	0	1	1	0	2
家庭	自立	3	2	7	5	1	18
家庭	強い女性	0	4	5	1	0	10
家庭	被害意識	2	0	0	1	0	3
自立・人間として		1	0	2	0	0	3
合計		31	27	30	16	8	112

表7　両親の養育態度と女性意識の変化

父 / 母	家庭	自立 / 家庭	家庭 / 自立	家庭 / 強い女性	家庭 / 被害意識	自立・人間として	合計
受容→受容	9	1	2	1	0	0	13
抵抗→受容	11	0	4	1	0	1	17
抵・中立→抵・人間性	7	0	4	3	0	0	14
合計	27	1	10	5	0	1	44

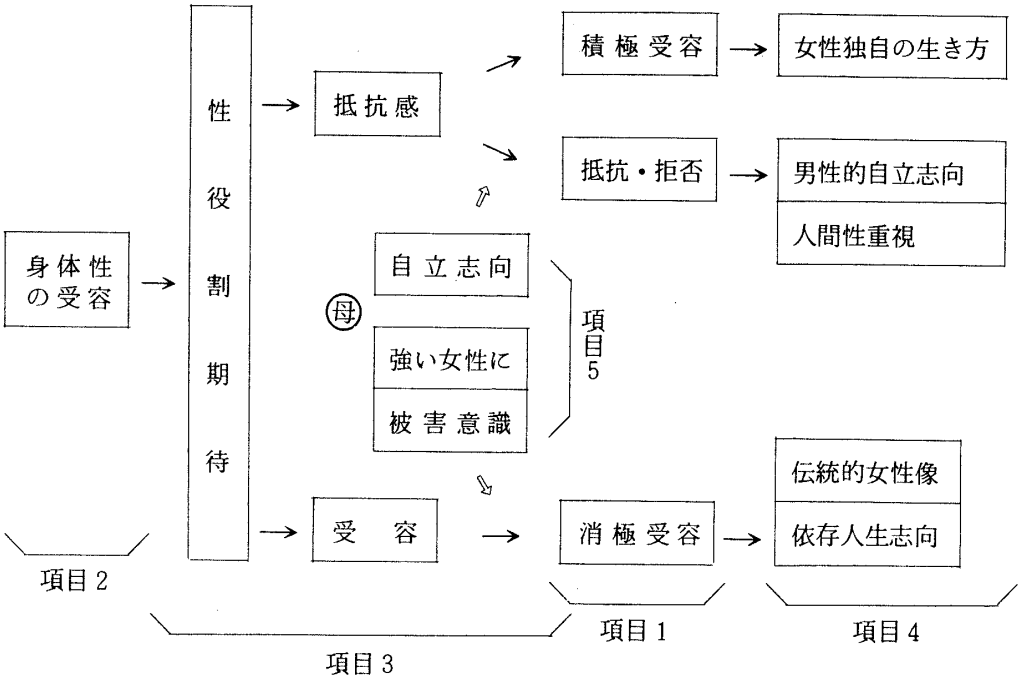

図6　女性性獲得の過程

また母性イコール女性という考えをあまりもたないことも特徴であり，男性的な強さを求めている。

(4)　女性性受容と両親の態度

表4が項目1と5の関係である。母親が家庭志向でない場合，娘の女性性拒否を生じやすいことは容易に想像されたが，家庭にあっても社会性・強さをもつことを期待されて問題意識稀薄となっているもの，父母ともに自立志向であるのに消極受容でしかないものの存在からは非家庭志向の母親の中にもしも矛盾や無理があったとすると，娘は当惑し，女性であることに曖昧な態度を示すようになるかもしれない。

(5)　女性役割観とこれまでの女性意識の変化

表5は項目4と3の関係を見たものである。一貫して非受容的であったものは自立する女性像をめざし，抵抗から受容に変化したものと受容のままのものとは所謂女らしい女・母性的な女性をめざしている。性役割観は，現在の受容・拒否感との関連が強い。

(6)　女性役割観と両親の態度

項目4と5の関係は1と5の関係に似ており，母親の自立志向と娘の自立志向は対応するが，社会性・強さ志向や被害意識をもった母親のもとでは，娘はむしろ伝統的女性像をもつ。(表6)

(7)　女性意識の変化と両親の態度

母親の自立志向は，抵抗→抵抗の場合に最も多く，次が抵抗→受容，そして受容→受容の場合に最も少なくなる。(表7)

以上のことから，項目間の関連を図示してみると，図6のようになる。身体性の受けとめ（項目2）については他の項目との関連において特徴がなく，親の養育態度（項目5）は回答が一種類に集中している。一方，現在の女性性受容感（項目1），性役割観（項目4），過去の女性意識の変遷（項目3）の間には，図6のような関連が見出された。そこで，この3項目を組み合わせた3種のパターン――項目1で用いた概念を中心に考え，積極的受容型・消極的受容型・女性性拒否型と呼ぶ――に，いずれの項目にも曖昧な回答をしている問題意識稀薄型を加え，4つの類型を，短大生の女性性獲得過程としてとらえることができる。

3　短大生における女性性獲得の型と例

これまでの分析から，短大生の女性性受容過程として4類型にまとめることができたので，以下にそれぞれの女性性のあり方を要約し，次に具体例を紹介する。

①積極的受容――母性や，芯のある女性らしさなど，女性の中にある強さ・素晴らしさを見出し，前向きかつ積極的に女性であることを受容している。しかし，女性性受容に至るまでの過程は単純ではなく，女性性に対する抵抗の時期も経験している。また，いわゆる〝女らしさ〟以外に積極的に女性の意義を見出している。

②消極的受容――女性であることを受容してはいるものの，それは男性より女性の方が生きていく上で楽であるという理由からであり，もっぱら男性に依存して生きていくという女性イメージを受け入れている。女性性受

容の過程において，ほとんど危機に直面することもなく，女性であることをすんなり受け入れてきている。

③問題意識稀薄―― 女性に生まれてよかったという特別な理由や意義は見出されていない。これまでに「女性であること」をほとんど意識していなかったり，意識した場合でも表面的レベルのもので，内的には「女性であること」への問題意識は持っていない。女性イメージとしては，いわゆる「女らしさ」を受け入れている。

④女性性拒否―― いわゆる「女らしさ」への反発や自立への志向を持つ。周囲からの女性役割期待に対する反発を感じており，女性としてより人間として生きたいと考えている。女性であるがゆえの制約を感じ続けており，それゆえ生まれ変われるなら男性として生まれ変わりたいという考えを持っている。

例1　積極的受容　（母性を強調）

項目1（受容）　女性に生まれて良かった。女性の方が自由に生きられると思う。例えば，就職に関しても，男性はまずそれで一生が決まってしまうようなことがほとんどであって，責任というものに縛りつけられてしまう。しかし女性はこのことに関しては選択の幅も広いし，自由なのではないだろうか。また，女性は母性を持っていて，それは男性にはできない素晴らしいことだと思うから。

項目2（思春期）　思春期に入った頃は，女性であることはいやでした。その頃は母性というものを全く無視して，男性的なもののみを見て，そこで男性とはりあおうとしていたから。でも現在は，母性の重要性を強く感じています。第2次性徴については，男性と女性とでどうしてこんなにちがいが起こるのか不思議でした。

項目3（女性意識）　**小学校**　5～6年生以前は，全く自分の性については考えもしませんでした。女も男も全く一緒という感じ。野外生活，修学旅行の生理についての話とか，水泳の授業の前に男女別に着がえるようになってから意識しはじめたようです。　**中学**　私は女子校だったので，あまり意識にのぼることはありませんでした。　**高校**　一時，キャリアウーマンに興味を持って，女性であることを否定していました。また強く私は女性であると思った時期でした。　**現在**　女性であることを意識し，それを肯定しています。女性は母性を持っており，それは，この社会において重要なことであり，男性にはできえないことだから，女性であることは強いことだと思います。高校時代までは，男性の中で女性を意識してきましたが，今は，それももちろんありますが，女性の中で女性を意識することもあります。

項目4（女性観）　女性であるとは妊娠し出産し，次の世代を養育する義務を持っているものであると思う。女性は，大地であると思う。私は強い母であり，やさしい母であり，平和な家庭を築ける女性になりたい。

項目5（親）　**父親**　男尊女卑，女は男につかえるものであると考える。しつけにはやかましく，「女のくせに」といったたぐいの発言が多い。　**母親**　女だからといって，甘えてはいけない。ある程度一人でも生きていけるべきであると考えている。単に生きているだけでなく，目標を持って生きてほしいと思っているようだ。

例2　積極的受容　（女性讃美）

項目1（受容）　私は自分が女性であることで，この世に生まれた最上の喜びを感じています。今さら男性に生まれ変われと言われても，私なら，生まれ変わって再び生きることができないのであっても（女性としては生き続けることができないとしても，男性には生まれ変わらずに）女性のまま死にたいです。理由は，結局は自分が現在女性であり，男性であることの良さとか快感を知らないからなんだろう。とにかく，愛らしいもの，はかないもの，やわらかいもの，ひかえめなもの……私の憧がれるもの求めるものが女性の特権（徴）であるから，女であることが嬉しい。

項目2（思春期）　女性であることに幸せを感じました。女性だからこそ好きな男性ができて，こんなにいろんなことで悩んで，涙して，感じて，苦しかったり，〝だから女の子って損なの〟と，男性のように気持ちを卒直に表わすことに抵抗を感じたりするそのものがすべて，女性であることを実感させ嬉しかった。体の変化は恥ずかしかったし，なんか大人に近づくのに抵抗があった。美しいものとしては受け取めれなかったけれど，自分だけではないし，あまりこだわらなかったと思う。でも，現在，日々自分の体に対して思う気持ちとは全く異質だと思う。

項目3（女性意識）　**小学校**　体育などの着替えで男女別々だったので意識させられた。宿泊行事での入浴の時，男子にのぞかれることや同性の目がいやだった。衛生講話で男女分けられた時。　**中学**　宿泊行事での入浴の時，発育不良のため，のぞかれることや同性の目がいやだった。　**高校**　初潮にショックを受け，かなりの抵抗があったが，明るく喜んでいるかのようにふるまった。宿泊行事での入浴がいやだった。赤ちゃんのつくり方を知った時，1カ月ぐらい自分を見失っていた。女性というより，大人の男女に違和感がむらむらわいた。　**現在**　宿泊行事での入浴はいやだけどひらき直ってきた。女性であること，女性の体をもつことを素直に受け入れていると思う。もっと美しくなりたい，男性のために美し

くなりたいという気持ちがいつもあると思う。

項目4（女性観）　いつも愛らしくありたい。いつもはかなくありたい。いつも優しくありたい。いつも柔和でありたい。いつも暖かくありたい。いつも控え目でありたい。自分を捨てたり見失ってしまうことなしに，人に尽くしたい。全て，人間であることを前提とした上で考えたいと思っていますが。

項目5（親）　**父親**　女らしく，良家の子女でありなさい。上品で，優しく。そういう女の部分はあたりまえのこととして，何か技能を持つ国際女性になってほしい。

母親　一般的な女らしさは大前提として，何か特技のある，いつかは一人でも経済的にやっていける人にならなくてはいけない。自分の考え方，自分らしさは持ってほしい。女性であることの幸せを感じて，いつも愛らしくいて欲しい。

例3　消極的受容　（男性への依存）

項目1（受容）　女性に生まれてよかったと思う。男性はしっかり仕事を見つけなくてはいけないけど，女性は結婚という逃げ道があるし，やしなってもらえるという気持ちがあるから，あまり就職のことも真剣に考えなくてすむ。男性にたよれるから。今度生まれ変わっても，女性がいいと思う。

項目2（思春期）　記入なし。

項目3（女性意識）　**小学校**　小学校6年生のときの初恋。　**中学**　バレンタインデーに好きな男の子にチョコをあげたこと。水泳の時間，男女一緒にプールに入るので，水着姿の自分がはずかしかった。　**高校**　特定な男の子が出来て，一緒に映画を見に行ったり，ピクニックに行ったり，ごく普通の交際だったけど，あの時は胸がわくわくしていて毎日が楽しかったこと。　**現在**　高校時代までは結婚のことなど少しも考えなかったのに，短大に入ってから将来のこと，結婚したらだんな様につくしたいとか思うようになった。料理の本とか買うようになったこと。

項目4（女性観）　やさしさを持っていて，常に男性より一歩さがっている女性のことだと思う。女性の自立というものが多くなってきているが，この社会の中で女性が一人で生きていくなんて事はできないし，女性は誰れだって弱い者だから，男性にたよっていきたい。

項目5（親）　**父親**　おしとやかな，男性をたてる女性。言葉づかいにうるさい。　**母親**　女らしくて気品がある女性。

例4　消極的受容

項目1（受容）　よかったと思います。性格的に女性的というか，何かあまりしっかりした所がないので，男だったら頼りがいのない男になってしまいそうです。それに，内にこもりやすいたちなので，家庭の中で，家庭を守っていくことの方があっています。今度生まれるとしても，やはり女性がいいです。男性は，とてもたいへんそうで……　私には耐えられそうにない。

項目2（思春期）　あ，やっぱり女性なんだなあ，と，わりとすんなり受け入れました。でも昔からやせていたので，きわだった体つきの変化はありませんでした。だから，周りのみんなが変化していくのを見ていると，とてもうらやましくて，私もいつか，そうなるだろうと，ぼんやり期待していました。そういう風だったので，初潮があった時は，うれしかったですし，今でもわずらわしいと思ったことはありません。ただ，この間，出産する女の人のシーンがテレビに出てきて，（実際の妊婦です。ドラマではなくて）あまりにも苦しそうで，少しこわかったです。正直いって，見たくなかった。目をおおいたくなるとまではいかなかったけれど，グロテスクすぎて，こわくなりました。そして，そんな自分に気づいておどろきました。

項目3（女性意識）　**小学校**　あまりなかったように思います。男の子，女の子という区別の感覚しかありませんでした。でも，学校で性教育のあった時は，ぼんやり意識していましたが……　**中学**　意識したのは初潮があったときでしょうか……それから，わりと，男の子に騒がれたりした時に感じました。また，男の子を好きになった時，男の子が，より男性らしく見え，その時に自分も女性であることを意識しました。　**高校**　あまり意識しませんでした。受験に追われて。でも，やっぱり男の子を意識した時に，自分も女性であることを意識したような気がします。　**現在**　家で夕食の手伝いや後片づけをする時。夜，遅くなって，帰り道が不安な時。ちかんに会った時。恋愛をしている時。

でも，今まで，意識したことはあっても，違和感をもったことはあまりないような気がします。

項目4（女性観）　男性にはない面をたくさんもっている。細やかな心づかいとか，性格的なまるみ，受容，弱さもある。そして，子供を産んで育てる強さ，底力をもっている。愛情をたくさんもっている。一生けんめいにつくす。こんなものが，女性のイメージです。私自身，そのような女性でありたいです。大きく，つつみこむようなゆったりとした女性でありたいと思います。

項目5（親）　**父親**　父は中1の時に亡くなっていませんが，たいてい，女性とは，やさしくあるべきだと思っていたと思います。そして，女性でも，少くとも私には教養を期待していました。　**母親**　多分，やさしく家

庭の中で生きるものだと思っているのではないでしょうか。それでも，父と同じように，教養もある程度は期待しているようです。　**その他**　兄は，教養は絶対に子供を育てるために必要であると考えています。そして，従順で，男性のためにつくすべきだと思っています。

例5　女性性拒否　（アンビバレント）

項目1（受容）　男性に生まれたい。女性として生きる前に人間でいたい。しかし，その方法はむずかしいので，男性でいれば，それは自然にできると思うから。それでも，女性であることと人間であることを区別する考え方はしたくないと思うのです。

項目2（思春期）　何も感じなかった。月経については，めんどうでいやだった。

項目3（女性意識）　**小学校**　夏，水泳で更衣室が，男・女と分かれていることについて，男と女を意識した。**中学**　男・女が，体育の授業で分かれていること。初潮を向かえた時。女は家庭科，男は技術科について。**高校**　男の子と交際した時。自分は女の子なんだと思ったけど，相手が必要以上に（私に）女らしさを求めたことに違和感をもった。　**現在**　ボーイフレンドができた時に，女であることを意識した。そして，ボーイフレンドが私に食事の仕度を要求して，実際，それをした時，女であることを意識しながら，同時に，違和感も感じた。自立したいと願いながらも，どこかで守られていたいとも感じている自分に，やっぱり女なのかと思ってしまった。

項目4（女性観）　女性は，男性から軽く見られていると思う。イメージ的には，外見を気にする人種だと思う。そして，常に男性を意識して生きているのではないか。私は，外見にとらわれず，自分らしさを失わない女性でいたい。

項目5（親）　**父親**　女性は，男にかしずく人間で，男次第で女はどうにでもなると思っていて── 偏見的な方です。女の自立なんか考える女性は，生意気だと申します。はっきりいって，関白な方で，私は反発を感じております。　**母親**　女性にも自立は必要だと私には言うけれど，自分は，あまり行なっておりません。自分ができなかったことを私に求めているのかもしれません。

例6　女性性拒否型　（女性嫌悪）

項目1（受容）　〝嫌だ！〟とは言わないけど，今度生まれるなら男に生まれたい。理由……男に生まれたなら，独立せざるを得ない状況に置かれるから。

項目2（思春期）　女性であること自体は，何とも思わなかった。しいてあげれば，女同志のいやらしさを感じたぐらいです。

項目3（女性意識）　**小学校**　特になし。　**中学**　クラスで，男の子同志はみんなでワイワイやっているのに対し，女の子同志はグループに分かれ，交流も少なく，すぐ，イザコザがおこったので，女ってのはちっこくて嫌だと思った。　**高校**　女であるがゆえに，まわりからの抑圧があったり，社会の中でも女と男の区別がとても激しいことを知り，女なんて嫌だと思った。　**現在**　多くの女性は，とても保守的で，女性の立場が低いのに対し，逆にそれを利用して安住していると思う。そういう人々を見ると，その中に自分の姿も見出され，非常に嫌だし悲しくなる。女性である以上，確かに保守的になりがちだが，その中で流されてしまっては，人間ではなくなってしまうと思う。自分というものを確立したいとつくづく思う。

項目4（女性観）　あまり女性と男性の定義づけをするのは賛成できない。

項目5（親）　**父親**　短大ぐらいを出て，会社に入って，一流のおむこさんを見つけ，安定した家庭におさまり，できのよい子供を生む。　**母親**　父親と同じ。

例7　問題意識稀薄

項目1（受容）　私は女性に生まれてよかったと思っています。生まれ変われるとしても私は，もう一度，女性でありたいと思います。なぜかというと，生まれてから，現在まで，そんなに女性であることが，嫌だと思ったことがないから。

項目2（思春期）　あまり深く考えたことはない。第二次性徴（生理）があった時，女ってあまりおおやけにはできないところですっごく，苦労してるんだなあって思ったことがある。

項目3（女性意識）　**小学校**　記入なし。　**中学**　保健体育の時間，男・女にわけられた時。　**高校**　日常会話の時，違和感を感じます。　**現在**　記入なし。

項目4（女性観）　「女性である」ことは，受身的なものであるから，やっぱり，誰に対しても，やさしくあるべきであると思う。どんなことがあっても，優しさをふるまえる女性になりたいと思う。

項目5（親）　**父親**　あまり，こういう女性になって欲しいとかないみたいだけど，やはり「女の子らしく」と，ごく一般に，言われるような女性になってくれればいいと思っているんだと思う。　**母親**　女性は，やはり，男性によって変わるのだから，みんなに好かれるような女性になれと言われる。

V 考　察

1 短大生の女性性の特徴

今回の調査結果から116名の短大生の特徴は次のようにまとめることができる。

①約6割のものが，積極的，消極的に自己の女性性を受容しており，2割弱の問題意識稀薄型をも含めれば，8割弱が受容的なあり方のうちにある。

②残り2割強が自己の女性性に拒否的である。この型の内容がもっとも問題となるが，しかしその内容はそれほどラディカルなものではない。

③とくに，消極的受容と問題意識の稀薄な型にあらわされる伝統的女性像志向，依存人生志向がとりわけ目立っている。

④思春期の変化には，深刻とまではいかない抵抗感をもつ程度である。

⑤女性であることの意識のきっかけは，年令が上がるにつれて，身体的外見的なことから社会的対人的な側面へとうつっていく。それに伴う感情は，無意識的中立的から受容的ないし拒否的へと二方向に分かれる。

⑥女性役割観としては，一般的女性像をとり入れたものが多いが，それを否定あるいは乗り起えて新しい女性像をつくりたいとする動きもみられる。

⑦両親の娘に対する期待は家庭人志向がほとんどで，殊に父親はそうである。数少ないが母親が自立，ないしそれに準じた社会志向をもつ例もある。

以上，要するに，彼女たちは一般に「女は女らしく」「家庭にあって」「男性に従っていく」のをよしとするいわば伝統的，依存的な女性性イメージを持ち，それを受容しているという傾向にある。本論のはじめに述べたような現代における女性意識の高揚した風潮からすれば，むしろ意外なほどにそれは消極的，保守的ですらあるように思われる。しかしながら，彼女たちがほとんど性的同一性の混乱に陥っていないという意味では，これは非常に健康な姿であるともいうことができる。ともあれ，今日，女子の大学進学率は3分の1であり，そのうちの約8割が短大である（―1979年―，女性の生活史研究会，1981）という事実からすれば，以上のような短大生の女性性受容のあり方は，今日の同年令層の一般的な姿をかなりのところ代表しているとみなしても，それほど間違いにはならないであろう。

このように彼女たちが，一般に女性性を受容しているということには，両親のもつ女性像や性役割期待，あるいは教育機関のあり方とも関係している。後者に関していえば，大村（1977）は「女子短大生のほとんどは私立校に在籍しているが，私立短大での教育は女子の特性を活かした『女性の天職的教養』を身につけさせることに重きをおいている」という意味のことを述べている。そもそも，そのような傾向をもつ短大に彼女たちが進学したということ自体に，そうした価値志向性を肯定する母集団のうちに彼女たちが本来あったのに他ならないということが示されている。

また，女性は「経済力をもちにくい現代社会において相手に依存しがちになり，そのため相手に自分をあわせようとして」「男性が理想とする女性像」にとらわれやすい（女性の生活史研究会，1981）ために，男性に頼り従うという消極的受容が多くなるということもいえる。ちなみに，高校時代以降になると，みずからが女性であることを意識したきっかけとして，男性の目を気にしたことや男性との交際，恋愛等をあげているものが増えている。

こうして今回の調査においては，短大生たちの多くが男性依存的な伝統的女性像，あるいは消極的受容のあり方のうちにあり，いくらかの葛藤や社会的不利を感ずることはあっても，あまり問題意識はもっていないという傾向のうちにあることが明らかとなった。

しかし，それにもかかわらず，われわれが直接に出会う彼女たちと同年令層の女性たちの訴えには，以上のような一般的傾向とは少々ニュアンスを異にして，より切実に女性の主体的独自的，個性的な自己世界を実現していきたいという想いがこめられているように思われるが，この点については，どう考えたらよいのであろうか。あるいはひとつには，一応いわゆるタテマエとしては少々深刻に「自立，自律」と叫んではみても――そう主張しておかないと，今日では知性ある進歩的，自覚的現代女性とはみなされがたいという風潮や，あるいはそうみなされないのではないかという不安や体面も作用してか――，実は「シンデレラ願望」こそがホンネであったということなのであろうか。

もしそうであるとすれば，われわれは次のように思う。すなわち，こうしたシンデレラ願望自体は，決してダウリング，C.（1981）がいうような超克すべき「コンプレックス」なのではなくて，むしろ，今日やはりそれが多くの女性のうちにみいだされるということ自体に，こうした願望をもちうることこそが，女性性のひとつの自然な本来的契機，いいかえれば本質的構成要素に他ならないのだということがあらわされていると考えた方がよいであろう。（その際，そうした願望は大部分，後天的に形成されたものだから，「本質」的には無意味であろうという議論は全く問題にはならない。われわれは後天的に社会化されなければ，そもそも立って歩くことも笑うことや話すことも，男らしく，あるいは女らしく，ひと

ことにして人間らしくなることも，すべて不可能だからである。）

重要なのは，うちなるシンデレラ願望を明確に意識化し，いわばそれをテコにすることによって，もっと積極的にみずからの女性性を肯定・受容し，豊かな女性独自の世界を展開させていく方向に彼女たちは向けられるべきであって，消極的受容以下の型においては，そのあたりが明確化，意識化されないままに十分割り切れていないという未熟さにこそ難関があるのではないだろうかということである。なぜなら，みずからの女性性をあまりに意識化し問題化しすぎるのも不健康ではあるが，逆にそれに対して全く何の問題意識や自覚をもたないというのも，対自存在としての人間という意味で「人間」的ではないといわなくてはならないからである。臨床場面でわれわれが，必ずしも女性性の受容が直接の問題とはなっていない（たとえば登校拒否や対人恐怖症のような）女子ケースに対しても，そこへの方向づけに，つまり彼女たちの女性性を保証し，うけあい，より開発していくような方向に，少なからぬ重点をおくのは，以上の点に根拠がある。

また，他者に依存的にではなく，自律的に，より自分らしく個性的に自己世界を保有して生きていきたいという彼女たちの志向性と今回の調査結果との関連についての考察には，さらに別の視点を導入する必要があるかもしれない。すなわち，それらの志向性は，単に女性性の受容と拒否，あるいは男性への依存と自立という軸上においてのみ提えられるものではなく，それとは別の，青年一般にとっての「自己確立」への要求，あるいは「自己実現」への関心といった次元も考え，それらの関連，または統合の問題を検討する必要もあろうということである。

そこからはまた，自立か従属か，職業か家庭か，家事を分担するかどうかといったひとつの世界を単純な二元論で分割するような発想とは全く別に，他者と共通の，いわば共同相互存在的な世界に入りこむことによって，一見いかに自己委譲的にみえようとも，それが即，それぞれにとってお互いが百パーセントずつもっとも自己的で，しかも女性的，あるいは男性的でありうるような自己実現の方向もあるという発想も可能となってくる。

いずれにしても，これらの問題の一層深まった考察には，今後の研究の展開をまたねばならない。

2. 今後の研究の方向性

そこで，今回の調査をふまえて，女性性の内的受容に関するいくつかの側面に関しての，今後の研究の方向性について次に考えておきたい。

女性性受容過程でのつまずきのきっかけは，一般に身体的問題と社会的問題とに大きく分けることができるが，身体的問題の受容は自己受容の暗黙の前提であって，そのことを一過性的に意識し，違和感を覚えることはあっても，たとえば精神分裂病や思春期やせ症において問題となるような形でつまずくことは稀である。実際，今回の調査においても，女性性拒否群の背景をなしていたものは，ほとんどが社会的女性性役割への疑問など社会的側面への抵抗であった。しかしながら，これらの社会的側面への抵抗も，基本的には，自立したい，自分を確立したい，人間として生きていきたいといった人生肯定的な積極的，前向きな態度のあらわれでもあり，今後ますます少なからぬ女性にとって問題とされる課題であると思われる。自分が女性であることの受容と，自分を確立し，人間として生きていきたいという自己実現の方向性との洗練された統合がいかに可能となりうるのか，この問題についての立ちいった検討がなされなくてはならない。今回の調査にあたって，こうした問題意識も大きな視点のひとつとしてわれわれのうちにあったのであるが，結果的には，質問紙という方法，対象が女子短大生であったことという制約のために，それは達成できなかった。ここから次の二方向性が示唆される。ひとつは，すでにそうした洗練された統合を実現していると思われる，少なくとも30歳以上の女性たちを被調査者とすることである。ここでのサンプルとしては用いられなかったが，実はわれわれは少数ながら，そうした女性たちからの回答をもうることができた。それらはどれも非常に興味深いものであって，こうした被験者による組織的な検討ができれば，おおいに実りある結果が期待しうるであろう。もうひとつは，「内的な」受容過程に迫るに足る方法，より深層の微妙な動きを把握しうる方法として，くりかえし面接や深層検査などによる接近が必要であるということである。短大生年代では，彼女たちが必ずしもこうした内的受容とかその過程といった微妙な問題を意識化し，自覚しているとは限らない。従って，彼女たちの表明は現象的にではなく，現象学的に捉えなおされ，一段高い次元から意味付与されなおされなくてはならない。それが可能となった時，健康な対象にとっての，思春期への入りこみとそこからの離脱の意味，女性性の受容と統合の過程が一層，明確化されることになろう。

上にあげたことは，ひとことでいえば，臨床心理学的方法のもつ重要性が再確認されたということになるが，その中には当然，病理例を対象として病理面から健康なあり方を明らかにする接近が不可欠であることも含まれている。女性性受容の過程で決定的なつまずきを示した事例の詳細な検討を，われわれにとっての次の課題とし

たい。

女性性受容の道筋は必ずしも直線的ではない。今回の調査においては，自らが女性であることについて，いったんは違和感や抵抗感をもったもの，あるいはそのことを意識化しうる感受性をもちえたものの方が，積極的受容へと変化しやすいことが明らかにされた。われわれの被験者においては，女性性拒否群にしても積極的受容群にしても，この段階での一応の基本的女性観はできあがってはいる。しかしながら，これらの女性観は今後のライフ・サイクルの中で，就職，恋愛，結婚，出産，育児等々の体験によってまだまだ多くの変遷がとげられることであろう。この点で，各群の今後の変容をライフ・サイクルの節目ごとに追跡的に捉えたり，典型例のフォロー・アップを行うなど長期的な見通しにたった女性性受容過程の縦断的研究の方向性も必要であると思われる。

女性性受容の過程においては，父親よりも母親の女性観のあり方の方が，本人の女性性受容のあり方に影響しているようである。今回の調査では，母親の自立志向，非家庭志向が，娘の女性性拒否，または受容してはいても漠然としたものであるようなあり方と関連していることが示唆された。この点からは，両親への直接的なアプローチを含め，家族研究としての系統だった検討の余地も残されている。

文　献

ダウリング，C　1981　木村治美訳　1982　シンデレラ・コンプレックス　三笠書房

本田時雄・福井とみ子・伊藤裕子ほか　1977　女性の生活史に関する研究Ⅲ　3．4つの要因を中心として　日本教育心理学会第19回総会発表論文集，448－449．

本田時雄　1980　女性の生活と意識（1）　日本教育心理学会第22回総会発表論文集，514－515．

池田博和・伊藤義美　1977　現代好青年の同一性に関する研究―序報―　日本教育心理学会第19回総会発表論文集，454－455．

池田博和・伊藤義美・江口昇勇　1979　臨床青年心理学研究（Ⅳ）―女子症例に関する諸報告―　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**26**，77―93．

池田政子・福井とみ子・伊藤裕子ほか　1978　女性の生活史に関する研究Ⅳ　1．キャリア・パターンからみた生活史と性役割観の変化　日本教育心理学会第20回総会発表論文集，142－143．

池田政子・安富利光　1979　女子学生の人生計画と「女性であること」に対する評価との関係　山梨県立女子短期大学紀要，**12**，85―97．

稲垣知子　1969　青年期における女性の役割観の変容について　京都大学教育学部紀要，**15**，128－141．

伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究，**26**，1－11．

伊藤裕子　1980　女子青年における女性性の受容と性役割　日本教育心理学会第22回総会発表論文集，508―509．

伊藤裕子　1981a　女子青年の性役割観と父母の性役割観の認知　日本教育心理学会第23回総会発表論文集，500－501．

伊藤裕子　1981b　女子青年の性役割意識の構造　教育心理学研究，**29**，84―87．

女性の生活史研究会編　1981　いま女性は　福村出版

笠原　嘉　1977　青年期―精神病理学から―　中公新書463

柏木恵子　1967　青年期における性役割の認知　教育心理学研究，**15**，193－202．

柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知Ⅱ　教育心理学研究，**20**，48―59．

柏木恵子　1974　青年期における性役割の認知Ⅲ　教育心理学研究，**22**，205－215．

木村　敏　1981　自己・あいだ・時間　弘文堂

間宮　武　1959　性差研究（第2報告）　教育心理学研究，**6**，205－216．

三上英子　1981　独立次元としての男性性・女性性―新しい性度尺度の作製をめぐって　日本心理学会第46回大会発表論文集，551．

小倉千加子　1982　心理学的アンドロジニーの測定（1）自己評価・性役割観との関連　日本教育心理学会第24回総会発表論文集，414－415．

大村恵子　1977　性役割についての一考察　名古屋短大研究紀要，35―66．

鹿内啓子・後藤宗理・若林　満　1982　女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究―性役割タイプと自己能力評価を中心として　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**29**，101－136．

白井　常　1966　思春期の心理　松村康平ほか編　女性心理学　福村出版　34―65．

多田健治　1974　パーソナリティに於ける男女性の次元の検討　金沢大学教育学部紀要，**23**，205－218．

田代俊子・山村香苗・川浦康至ほか　1977　女性の生活史に関する研究Ⅲ　2．自己の生活歴とその評価　日本教育心理学会第19回総会発表論文集，446－447．

戸田和子・堅田弥生　1982　現代女子青年の性役割受容

に関する実験的動態分析の社会的受容の試論的モデル　北海道心理学研究，4，1—17.
湯川隆子　1979　性役割の獲得（4）—性役割の基準について　3．日本教育心理学会第21回総会発表論文集，264—265.

（1984年8月23日受稿）

付　　録

「女性であること」の意識についての調査

このごろ「女性の自立」とか「女性の自己実現」,「女性の生きがい」といった事柄がよくいわれたり，女性のための雑誌や書物がたくさん刊行されたりして，現代女性の独自の生き方やありようについての関心が，たかまっているように思われます。

ところが，こうした問題に関連する青年期の心理学においては，その理論がおもに男性を中心にしてつくりあげられてきているために，こうした問題に対して，今のところ十分な貢献をなしているとはいえません。

そこで，われわれは女性独自の青年期の意味を心理学的に追求したいと考え，自分が「女性であること」の意識について調査させていただくことにいたしました。

この調査結果の整理にあたっては，皆様の個人的な事情やお名前などは決して出しませんので，あなたの現在の卒直なお気持ちを是非ともおきかせいただきたく，ここに御協力をお願い申し上げる次第です。

名古屋大学教育心理学教室

1. あなたは，女性に生まれてよかったと思いますか。あるいは，今度生まれ変わるとしたら，男性と女性のどちらに生まれたいと思いますか。その理由も含めてお書きください。

2. あなたが，思春期に入った頃，自分が「女性であること」についてどんなことを感じましたか。あるいは，第二次性徴（初潮，体つきの変化など）について，どのようにうけとめましたか。

3. これまでに，自分が「女性であること」を強く意識したり，違和感をもったりしたのは，どんな時でしたか。それは，その後どのようにかわってきましたか。
   小学校時代；
   中学校時代；
   高校時代；
   それ以降〜現在；

4. ところで，「女性である」とは，どういうことだと思いますか。あなた自身の考えやイメージをきかせてください。そして，あなたはどんな女性でありたいと思いますか。

5. あなたの御両親や御家庭は，「女性」とはどのようなものであると考えておられますか。それに関連したしつけや期待，あるいは態度はどのようなものでしょうか。
   父親；
   母親；
   その他；

ABSTRACT

INNER ACCEPTANCE OF FEMALE IDENTITY (1)
– In the Case of Female Junior College Students –

Hirokazu IKEDA, Miyako MORITA and Junko AWATA

The purpose of this study was to grasp the characteristics of the sexual identity of junior college students. 118 subjects were asked to answer the questionnaire which contained the following five aspects of female identity.

1. The acceptance of female identity
2. The acceptance of physical change in early adolescence
3. What induced the awareness of their own sex
4. Their concept of the sex-role
5. Their parents' attitude toward child-rearing

As a result, the characteristics of female identity were as follows:

1. An orientation toward a men-directed life
2. No serious abhorrence of physical change
3. Toward their own sex, first they are neither acceptive nor rejective, but later they become the one or the other.
4. Most are satisfied with the general female image.
5. Parents, especially fathers, expect them to be house-oriented.

Furthermore, three processes of acquiring the female identity were found:

1. Those whose awareness of their own sex have been vague will usually become men-directed.
2. Those whose senses have changed from rejective to acceptive will tend to live their lives as women.
3. Those whose senses have become rejective will tend to live for themselves, like men.